

図書館だより 第10号

まさじ
特集1 岩倉政治文庫と夏目漱石コレクション



富山市の作家、故・岩倉政治氏の著書や蔵書、書簡等が、政治氏の二女、岩倉高子さん(遺族代表)によって富山市立図書館に寄贈され、5月13日、森富山市長から感謝状が贈呈されました。これを受けて、図書館では「岩倉政治文庫」(仮称)として、いただいた資料を整理し、市民に広く公開していきたいと考えています。

また、呉羽町の大田芳雄さんから、個人で収集した夏目漱石関係の作品・研究書など、資料1159点を寄贈いただきました。こちらも現在では入手困難な希少な資料がそろっており、夏目漱石コレクションとして整理し、公開していく予定です。

目 次

特集1 岩倉政治文庫と夏目漱石コレクション.....	1
特集2 第45回「こどもの読書週間」中の行事報告.....	3
私のおすすめ本.....	6
山田孝雄文庫の資料 10.....	7
レファレンスあれこれ.....	8

岩倉政治氏は1903年(明治36年)東砺波郡高瀬村(現井波町)に生まれ、今年ちょうど生誕百周年にあたります。大谷大学で鈴木大拙に師事し、親鸞しんらんを研究。その後マルキシズムに傾倒しました。

1939年(昭和14年)に処女作『稲熱病』が芥川賞候補作になり、以後「中央公論」「改造」「新潮」「文學界」「文藝」などに作品を発表。農民文学有馬賞を受賞した『村長日記』や、『行者道宗』など多くは砺波地方を舞台にしています。

戦後富山市に居住し、歴史小説『田螺たにしのうた』、日本初のSF映画となり、教科書にも採用された『空気がなくなる日』、自伝的大作『無告の記』など、30冊あまりの著作を著しました。

1981年(昭和56年)富山県芸術文化功労表彰を受け、1983年(昭和58年)には富山県文化賞受賞。その翌年北日本新聞文化賞、富山新聞文化賞を受賞しましたが、2000年(平成12年)5月6日に97歳で亡くなりました。

政治氏の遺族から寄贈されたのは、次のような資料群でした。

- ・ 校正資料(原稿類)と未発表原稿
- ・ 岩倉政治氏あて書簡
- ・ 所蔵絵画・賞状・岩倉政治氏のスナップ写真
- ・ 岩倉政治氏の著書・初出雑誌
- ・ その他の旧蔵書

校正資料や未発表原稿は故人の作品成立過程を知る上で欠くことのできないものですし、書簡は、鈴木大拙、棟方志功、亀井勝一郎、石川達三、石坂洋次郎、武者小路実篤、横光利一、尾崎士郎、吉川英治など同時代の著名な作家からのものがあり、作家研究資料としても価値が高いものです。公開する際は差出人に許諾を得る必要がありますが、研究資料として利用に供したいと考えています。

* * * * *

夏目漱石コレクションを寄贈された大田さんは、高校教諭としてお勤めでしたが、退職後、漱石の漢詩に興味を持ち、個人で漱石関係の資料を集めておられました。それも、富山市や金沢市の古本屋では足りず、東京神田の古本街にも奥様同伴で資料探しに歩き回っておられたほどだそうです。

今回寄贈された資料は、漱石の著作、研究書、研究資料、雑誌のほか、漱石ゆかりの人々、たとえば寺田寅彦や正岡子規などに関する図書も含んでおり、漱石研究の基礎資料としての価値が高いものといえます。

(中央館 宮本)



特集2 第45回「こどもの読書週間」中の行事報告

4月23日の「子ども読書の日」からはじまって、5月12日までの「こどもの読書週間」に合わせて、今年度、富山市立図書館では、「おはなしワールド」「第29回読んでみよう子どもの本展示会」そして「子どもの本リサイクル広場」という3つの大きな行事を開催しました。その模様をご紹介します。

(1)おはなしワールド

平成13年に国が「子どもの読書活動の推進に関する法律」を制定しました。この法律は、国や自治体、出版社、地域や家庭が一つになって、子どもの読書環境を整え、本とふれあうことで、子どもの健やかな成長を願うものです。

その第10条に、「子ども読書の日」を4月23日とし、その法律にふさわしい行事をするようにと定めています。

図書館では、その趣旨に基づいて「おはなしワールド」を企画し、子どもたちに“楽しいおはなし”を届けることにしました。

図書館職員に読み聞かせボランティアの協力もいただいて、市内33箇所の保育所・幼稚園を訪問し、1,472名の園児に絵本の読み聞かせや、おはなし、紙芝居などの実演を楽しんでもらいました。



メイン会場となったとやま高度情報センターのハイビジョンシアターでは、会場近くのなでしこ保育園と藤園幼稚園の皆さんに足を運んでもらいました。

ハイビジョンシアターは会場が広いので、大型絵本を使ったり、ミュージックパネルシアターを用いることによって、子どもたちの興味をひきました。歌にあわせて踊る帽子屋さんの人形の愉快なしぐさに、子どもたちは大きな笑い声を上げていました。



来年度は、今年開催できなかった保育所・幼稚園を訪問しようと計画しています。

(2) 第29回読んでみよう

子どもの本展示会

4月23日から5月11日までの間、「第29回読んでみよう子どもの本展示会」を7階特別室で開催しました。



昨年1年間に出版された新刊図書2,958点のうち、図書館が購入した2,085点の中から厳選した「図書館がすすめる400冊」の展示をはじめ、0歳から楽しめる「あかちゃんのえほん」や、ちょっと変わった仕掛けのある「目と手で楽しむ絵本」のコーナーを企画しました。

展示目録を従来のリスト一覧形式から、内容解説を付けた目録に改めたことによって大変分かりやすいと好評でした。

この展示会は、水準以上の児童図書が一堂に展示されており、直接手にとって見られることから、学校関係者や子どもの本に関係する方々から大変好評をいただいています。

今回の入場者は延べ724名で、期間中何度も足をはこんでこられる方も多く見受けられました。また、近県からも8名の方が例年のように来場され、時間をかけてゆっくり展示図書をご覧になっておられました。



「あかちゃんのえほん」のコーナーでは、35年以上も読み継がれてきたスタンダード絵本も展示してあり「あっ、この本読んだことあるわー」と懐かしそうに、自分のお子さんに読んであげているお母さんもいらっしゃいました。

子どもたちに人気があったのは「目と手で楽しむ絵本」のコーナーで、なかなか動こうとしないお子さんがたくさんいました。

また、父親の子育てに対する関心の高まりから、会場でお父さんの姿を多く見受けました。お子さんに本を読みきかせているうちに、お話の面白さについ笑い出してしまったお父さんや、会場のコーナーで開催していた「かみしばいランド」でお子さんと一緒に楽しそうに観てくださったお父さんの姿が印象的でした。



(3) 子どもの本リサイクル広場

平成12年「子ども読書年」を記念して一度開催した「子どもの本リサイクル広場」を今年から本格的な事業として実施することになりました。

開催は5月4日の日曜日でしたが、事前に除籍を予定している絵本や児童図書を、市内小・中学校の図書室や学級文庫の他、愛育園等での活用を計るため、学校図書館司書や関係者の方々に選んでもらい、1,462冊の本を再活用していただくことになりました。

リサイクル広場には、当館除籍図書2,888冊のほかに、市内の家庭から提供を受けた2,911冊の図書を加え、計5,799冊のリサイクル本を用意することができました。

開催当日は、早い時間からたくさんの家族連れが来館され、会場オープンの10時前にはいまや遅しと70名近くの方が並ばれました。

そして開場と同時に眼を輝かせていっせいに本の山に向かわれ、大人も子どもも本選びに没頭していました。



本を手にとって見せ合う家族、次から次へと手に取って見る人、ゆっくり品定めする人、迷いが多くてグルグル回っている人、閲覧用の椅子にかけて本格的に読んでいる子どもなど、にぎやかな光景が繰り広げられました。

最も人気が高かったのは幼児向けの絵本で、生後5ヶ月にならない乳児のために今から入手しておきたいというお母さんもおられました。

お話の本や知識の本も人気が高く、お父さんを交えご家族で選ぶ姿が多数見られました。

あとからこられる方にも十分提供できるようにと、一家族で10冊までに制限を設けましたがたいへん満足していただけただようです。

結果として2,142冊の本をリサイクルできた反面、1セット50冊以上にもなる文学全集や、大判の百科事典などは不人気でした。住宅事情や生活スタイルとも関連するのでしょうか、家庭における読書や本のコレクションの一端を窺うことができました。

次回の開催は、ご家庭から供出されるリサイクル本を考えると、2年か3年後に開催できないかと考えています。

なお、大人の本や雑誌に関するリサイクル事業は、今年11月23日(日)の勤労感謝の日に予定しております。



私のおすすめ本 *****



『殉死』
司馬遼太郎著
(文春文庫)

司馬遼太郎の作品はいずれも、「面白い」という語のもつ多種多様な意味で面白い。

とにかく面白いので読者は思わず読み急ぎ、作品の真価を悟らぬ浅薄な読み方をしながら、読了したことに一応満足する。

日露戦争で旅順要塞の攻略にあたった陸軍の第三軍司令官乃木希典の半生記『殉死』もまことに面白い。だがこの面白さは、単なる通俗小説的な面白さをはるかに越えて、熟読玩味へといざなう面白さなのだ。大作『坂の上の雲』の補完的な姉妹編であるこの作品は小冊子といえそうな小さい妹なのだが、時々私を沈思へ追い込んだ手ごわい乙女でもある。

読書子よ、心して読もうではないか。

それにしても『殉死』の形式には粗壁を思わせる無^{ぶざつ}雑さがある。ものを書くという営為に求められる形式への配慮は、素材の過剰に押し流されてしまったのだろうか。

作者自身も導入部で、これは小説として書くのではなく、かねて持ちつづけてきた疑問を確かめるための思考材料を、覚書として書くのだ、と断っているが、形式面に問題があることを自認しての表現と思われる。

形式上の不備、従って不美について不遜にも卑見を述べた。だからといって私の高い『殉死』評価には少しの揺らぎも無い。

司馬が歴史上の人物や事象を語るときの独創的な、しかも説得力に富んだ新解釈、また時として価値を大転換させる警拔な自説の展開などは、この作品にも指摘される特色であり、読者を魅了し敬服させてやまず、形式面の^{かまが}瑕瑾など「九牛の一毛」にすぎないだろう。

さて、乃木希典が将器に乏しく、將軍としては無能に近かったことの例証は『殉死』第一の課題と思われる。しかしこれは作中頻繁に果たされている問題なので、以下、雰囲気、この「無能」を語るさまざまな部分とは大きく異なる一場面を紹介し、これを読むことに、高跳びをする前に競技者が行う助走のような意義を持たせたいと思う。

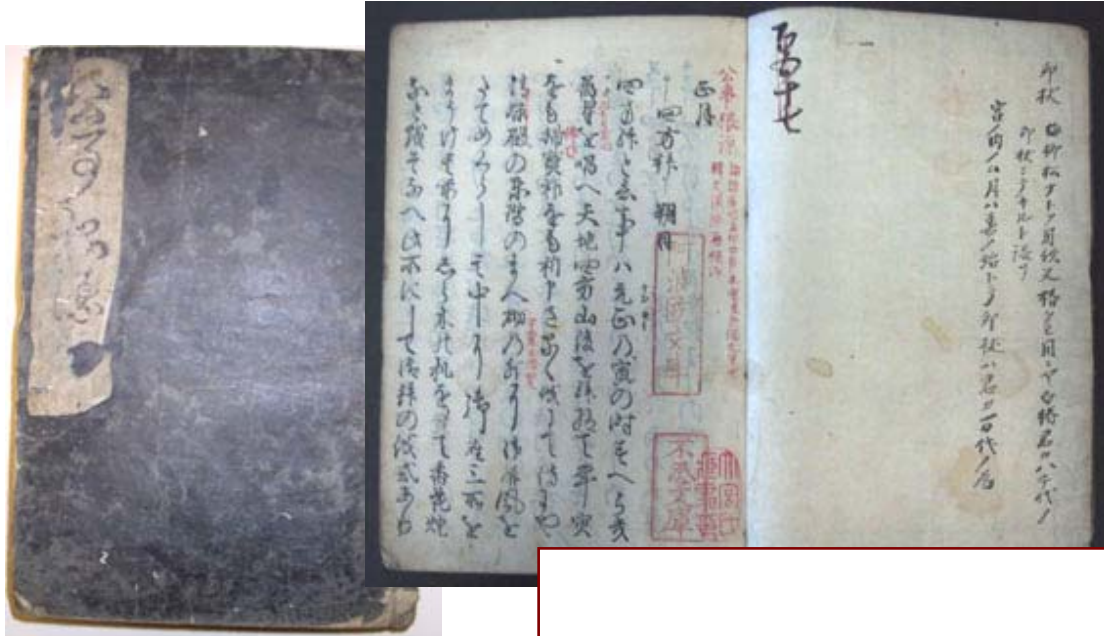
日露戦争が勝利に終わり、礼服に身を固めた將軍、提督たちがそれぞれ戦闘経過を御前報告したとき、彼らは幕僚のしたためた文章を読むだけだったのに、乃木だけはまだ戦闘服のまま自筆の名文を読み、やがて声涙ともに下って中断し、将星らが遠慮して座を外さねばならなくなった。帝への復命がおわらぬ限り戦争は継続中という信念ゆえの戦闘服だったのであり、帝はこの郎党のような乃木がお好きだった。

司馬は乃木の郎党性を、かなりの箇所具体的に生き生きと解説してくれる。しかし、「乃木はつねに劇的であった」と判断は冷やかだ。

では読書子よ、『殉死』に意欲を燃やし、しばし読書三昧の時を持つてうではないか。

(吉田 清)

執筆者紹介 富山市在住。富山大学名誉教授。『藝文とやま』や北日本新聞で富山県同人誌文芸時評を担当していた。文芸同人誌『憑人』の相談役をつとめていたが、現在は引退。



七夕、盂蘭盆^{うらぼん}など夏の年中行事の由来などを調べていると、「『公事根源』によれば…」というような文言によく出くわす。その公事根源とはどのようなものかは知らなくても、それがどうやら有名かつ権威のある有職故実の書らしいということが分る。

「公事」とは朝廷の公的行事・儀式の意である。宮廷の年中行事を月日の順に項目を挙げて、その起源、本質、公家行事としての価値などについて、解説した書である。著者は二条良基^{よしもと}とも、あるいは一条兼良^{かねよし}が応永29年(1422)その子供のために書いたとも、また、応永年中に將軍足利義量^{あしかがよしかず}の求めに応じて書いたともいわれるが、近年は兼良説が有力である。

伝本には東京大学史料編纂所蔵の応永29年(1422)の写本、東北大学狩野文庫の寛政4年(1792)の写本、蓬左文庫の室町期と思われる写本、彰考館文庫の大永年間(1521 - 1528)写本などがある。山田孝雄文庫に収蔵のこの古活字本は元和年間(1615 - 1623)のものと思われる。保存状況もよく、原題箋(出版当初の題箋)が表紙に残り、古活字の刷りもあざやかである。

山田文庫本には、写真のように「不忍文庫」「阿波國文庫」の蔵書印がある。

「不忍文庫」は江戸時代の和学者で稀代の蔵書家として知られる屋代弘賢^{やしえひろかた}の蔵書印。弘賢の旧蔵書は質・量ともに有数の内容を誇っていたが、晩年に大部分を阿波国蜂須賀家に献納した。

「阿波國文庫」は徳島藩主蜂須賀家の文庫である。明治に入ってから旧臣小杉楯^{こすぎすだむら}等へ渡り多少の散逸もあったが、蜂須賀本邸・別邸に二万冊が残存、三万冊が県立光慶図書館に伝存していた。しかし、それも戦災と昭和25年の失火で多くが焼失した。一部が国立公文書館内閣文庫と徳島県立図書館などに現存している。偶々散逸していたものが山田孝雄の手に渡り、幸運にも戦火を免れたものと思われる。この意味でも、また来歴が確かであることから、山田孝雄文庫に残っているこの書は貴重である。

(中央館 亀澤)

レファレンスあれこれ

Q . 戦時中または、その前後に、富山市にある呉羽紡績の場所に呉羽航空機という会社があったようだが、その事情を知りたい。

A . 電話で、上記のような質問を受けた。

最初に、『富山大百科』(北日本新聞社、1994年)を調べてみると、呉羽紡績についての説明があるが、呉羽航空機については書かれていない。

そこで、昭和58年に呉羽地区自治振興会が編集した『呉羽の里』を調べると、<呉羽紡績の盛衰>という見出しで、「第二次世界大戦の開戦によって徐々に軍需優先の政策がうちだされ、昭和19年には、全面閉鎖となり、呉羽航空機株式会社として、福野工場と共に木製飛行機の製作工場に転向した。戦後、いろいろな統制が解かれ、呉羽工場も民需への切り替えが許され、昭和21年には、紡績工場として再起することになった。」と書かれていた。

念のため、『とやま近代化ものがたり』(北日本新聞社、1996年)も調べてみたところ、この本にも呉羽航空機と呉羽紡績のことが紹介されており、その跡地が現在、富山市舞台芸術パークや桐朋学園富山キャンパスとなっていると書かれていた。

(右写真：夜訪の柵図)

平成15年07月18日 富山市立図書館 編集・発行
富山市丸の内1丁目4-50 TEL 076-432-7272
HPアドレス <http://www.library.toyama.toyama.jp>
E-mail lib-02@library.toyama.toyama.jp

Q . 棟方志功が能や謡曲「善知鳥」(うとう)から題材をとって彫った板画(はんが)「善知鳥」を見たい。

A . 福光町にゆかりのある棟方志功の板画について上記のような質問があった。

聞かれた方は、板画「善知鳥」の「夜訪(よどい)の柵」を持っておられるとのことだったが、他の作品も見たいということで来館された。

著者から検索すると、9冊の本を所蔵していた。

その中から、まず『20世紀日本の美術 第18巻』(集英社、1987年)を見ると、板画「善知鳥」の4柵、「蓑笠(みのかさ)の柵」、「座鬼(ざき)の柵」、「連枝(れんし)の柵」、「夜訪の柵」が収載されていた。もっと多くの柵があるようなので、もう一冊『棟方志功板画大柵』(講談社、1969年)を見ると、28柵の作品が収載されていた。

* 柵(さく)...四国の巡礼者が寺々を廻るとき、首に下げる、寺々へ納める廻札の意味。

(棟方志功著 『板極道』より)



(中央館 柴田)